

## 上杉謙信の能登攻略と七尾城陥落

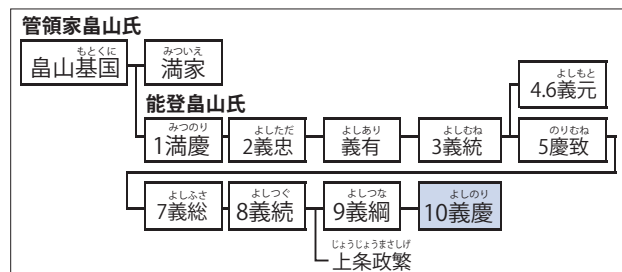


七尾城跡から見る七尾市街地と七尾湾

天正5年(1577)9月、天然の要害をもって堅固を誇った戦国大名能登畠山氏<sup>※1</sup>の居城七尾城は、越後上杉謙信の攻略によって落城した。ここに室町・戦国期の能登で、170年間にわたり守護として領国支配を展開した畠山氏は滅亡する。それは同時に、北陸における戦国的世界の終焉を意味するものでもあった。

### 謙信の能登進攻の意図

戦国末期の能登七尾城では、城主畠山義慶<sup>※2</sup>を支える重臣の年寄衆による合議体制が成立し、その間で主導権をめぐる駆け引きが潜行していた。能登畠山氏は、戦国時代を通して、北陸の一向一揆勢力との対抗上、越後上杉(長尾)氏とは、一貫して同盟関係にあった。このことから遊佐盛光・温井景隆・長綱連・三宅長盛・平堯知らの年寄衆は、北陸の政治的安定に期待を寄せ、表向きは揃って上杉謙信に、越中・加賀への出馬を促していた。



能登畠山氏略系図

しかし城内では、主導権を握る長綱連とその父統連<sup>つぐら</sup>が、謙信と敵対する安土城の織田信長と密かに通じ、温井景隆は本願寺=加賀金沢御堂の一向一揆勢力と結びつきを深めるなど、複雑な様相を呈していた。そうしたなかで、天正4年(1576)4月4日、城主義慶が急死したため、城主不在のなかで、その正室と幼い子息を、長統連が後見するが、城内の混迷は深まった。

こうした能登の政治状況に不信を抱いた謙信は、同年11月、先に越後に人質として送られ、上杉一族の上条氏の養子となっていた政繁(義慶の叔父)を、七尾城に送りどけて城主に据え、能登畠山氏を再建することを大義名分に、越後より海陸三方から能登に進攻する。しかし謙信には、かねてより能登を攻略し、越後から越中・加賀・能登へと上杉の分国を拡大しようとする意図があった。またこれに先立つ同年5月には、長年仇敵の関係にあった本願寺・北陸一向一揆と和睦し、一揆勢と結んで織田信長の加賀進攻に備えるようにもなっていた。

### 上杉氏の攻勢と能登占領

江戸時代に編さんされた『長家家譜』によれば、謙信率いる越後・越中勢からなる上杉軍万余騎は、北陸道を加賀に進んで、11月17日、河北郡の津幡宿(現石川県津幡町)から能登方面へと向かい、同郡の高松(現かほく市)に到った。次いで18日、高松を発って

※1 足利幕府管領家畠山氏の庶流。管領畠山基国没後、將軍義満に冷遇された兄満家に代わり、弟満慶(みつのり)が家督を相続するが、応永15年(1408)義満死後、兄に家督を返還。感謝した満家は、河内・紀伊・越中・能登の畠山分国4カ国のうち、能登一国を満慶に与え、能登畠山家が創設される。  
 ※2 能登畠山家10代当主。祖父義統と父義綱が重臣により能登から追放され、元服前の義慶が擁立されるが、早逝した。

北上し、能登国羽咋郡の一宮（現羽咋市）に居陣。翌19日には、同郡の滝谷（現羽咋市）・土田荘（現志賀町加茂地区）を経て、鹿島郡の大槻（現中能登町）に至り、20日になって七尾城下に近い天神河原（現七尾市）に押し寄せた。

この間上杉勢は、七尾城周辺を逸早く占領していったらしく、11月28日に、上杉方の部将吉江資堅・直江景綱が、羽咋郡の千路・鹿島路（現羽咋市）や鹿島郡の尾崎・水白（現中能登町）の村々の長衆に、七尾進攻に際し、臣従を求めていた。さらに翌12月4日には、謙信が七尾城と尾根続きの石動山（中能登町）に城砦を築き、直江景綱らを守将として配置した。12月19日、謙信が越中一向一揆の勝興寺に充てた書状に、既に能登一国を悉く制圧し、残すところ七尾一城のみとなった旨を報じている。

また江戸期に成立した戦国軍記の『畠山殿軍記』によれば、上杉軍は、謙信率いる本隊3万余騎とは別に、搦手から直江景綱率いる7000余騎が、越中の氷見から能越国境の荒山峠を越え、能登に攻め入ったとある。さらには鯨坂長実が、越後直江津から海路1万余騎をもって兵船で富山湾頭を横切り、奥能登珠洲郡の三崎（現珠洲市）に上陸した後、内浦沿岸部の城々を悉く攻め落とし、海上から七尾城の背後に迫ったとみえる。これは長年にわたる能登畠山氏との同盟関係のなかで、能登国の防衛体制を知り尽くした謙信が、かつて4年間にわたり籠城に耐え抜いた七尾城攻略の要諦として、奥能登と七尾城を海上で結ぶ糧道を断ち切り、同城の孤立化を企てた戦術によるものであった。

## 七尾落城と長一族の討滅

謙信は此の冬能登で越年し、七尾城の攻撃を続けたが、数千人の兵力をもって籠城し、頑強に抵抗を続ける七尾城の能登畠山氏方との間



七尾落城を伝えた上杉謙信書状(甲府市 信玄公宝物館所蔵)

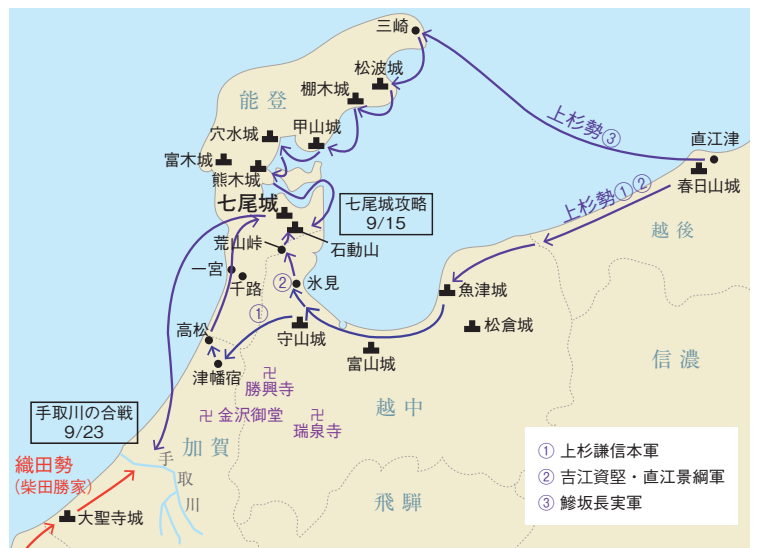
で、戦況は膠着状態に陥っていた。そうした中で、天正5年(1577)3月に至り、謙信は関東方面の政局不安により一旦越後に帰国し、同年閏7月になって再び能登に侵攻する。

一方七尾城方では、この間失地回復が企てられ、能登の各地において七尾城方と上杉勢の間で、合戦が展開された。また織田信長と結ぶ七尾城内の長綱連らは、謙信撃退の決意を信長に伝えるため、孝恩寺宗顯（綱連の弟、後の長連龍）を安土城に派遣し、信長からの援軍を求めた。宗顯はその途中、信長の勢力下にあった南加賀の大聖寺（現加賀市）に立ち寄り、織田方部将に能登の窮状を語っている。

やがて同年8月になって、織田方の七尾城救援に向けての援軍が進発し、柴田勝家らの織田軍は加賀まで進むが、9月になると七尾方との連絡が途絶え、能登の百姓らが悉く謙信に一味するようになったとの情報が伝わった。

そうした状況のなかで、9月15日、七尾城は謙信の昼夜分かたぬ攻撃にあって陥落する。その要因は、七尾城を守る畠山重臣の遊佐統光（盛光の父）が謙信に内応し、密かに上杉勢を城内に引き入れたためであった。この結果長統連・綱連父子など長一族100余人が討ち取られ、降伏した温井景隆・三宅長盛・平堯知らは、身命ばかりを助けられた。またこのとき畠山義慶の妻子は、謙信の能登攻めに加わっていた、一族の上条政繁にいったん引き取られた。

落城後、七尾城に登った謙信は、同城の要害を称揚し、絵像に写しがたき景勝と賛嘆して、戦勝の感慨に浸った<sup>※3</sup>。七尾落城を知った織田軍は、加賀から越前に退却することになる。



上杉謙信の能登七尾城進攻の進路

※3 この時謙信が「越後から能登を我がものにした」と感慨深く詠んだとされる漢詩『九月十三夜陣中作』が伝えられる（霜は軍営に満ちて 秋気清し 数行(すうこう)の過雁(かかん) 月三更(さんこう) 越山(えつざん) 併せ得たり 能州(のうしゅう)の景(けい) さもあらばあれ 家郷(かきょう) 遠征(えんせい)を憶(おも)ふ)。翌年3月、謙信の急死により跡目を争う御館(おたて)の乱が発生し、やがて上杉勢は能登から撤退。織田勢による一向一揆平定後、天正9年(1581)に前田利家が信長から能登一国を与えられ、七尾城に入城した。